

ハイダ語の複文構造：従属節の分類に関する試論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀, 博文 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028107

ハイダ語の複文構造：従属節の分類に関する試論

堀 博文

キーワード：複文 従属節 ハイダ語

1. はじめに

ハイダ語では、2つ（かそれ以上）の節を繋げて複文をつくる際に、従属節の述語動詞がいろいろな形式をとり、かつ、従属節であることを示す標識が付加される¹。例えば、次の例では、それぞれ従属節の述語が定動詞となったり、接尾辞 *-gaay* (*-aay*) ~ *-geey* (*-eey*) や母音変換によって名詞化されるなど、様々な形式をとる（それぞれの述語動詞の形式については2節を参照）²。

(1) 'lə=ʔistl'əɣa-gən=sgawdagi 'laa=ga ʔə=kil'laa-gən.

3=come-PST=because 3=to I=thank-PST

「彼（女）が来てくれたので、私は、彼（女）に感謝した」

¹ ハイダ語は、北米先住民諸言語の1つで、北米北西海岸地域で話される系統不明の言語である。本稿で主に扱うのは、カナダのブリティッシュ・コロンビア州のハイダ・グワイ Haida Gwaii（旧名：クイーン・シャーロット諸島）のスキドゲイト Skidegate で話される方言である。

² 本稿のデータは、典拠が示されていない限り、筆者が得たものである（他の文献から引用する際は、本稿の表記に改変して示すことにする）。例で用いる略号は次の通りである。

AFTH: afterthought, CAUS: causative, CNT: continuative, COMP: complementizer, FOC: focus, FUT: future, HABIT: habitual, IMP: imperative, INDF: indefinite (pronoun), INFO: information, NEG: negative, NMLZ: nominalizer, NPST: nonpast, PL: plural, POSS: possessive, PR: present, PST: past, REL.NPST: relative nonpast
ハイダ語の音素目録は次の通りである（[] 内に国際音声字母による表記を示す）: b, d, g, ɣ, ʔ; (p), t, k, q; ʔ', k', q'; s, ʔ, x, ɣ, h; j [dʒ], c [tʃ], c'; dl, tl, tʔ; m, n, ŋ; w, y, l; ʔ' [ʔ']; i, (e), a, (o), u, ə. 尚、閉鎖音と破擦音の有声字は無声無気音、無声字は無声有気音を表わす。また、/ / はゆるやかな声立てを表わす。

(2) sabəliigaay ʔaa qyaan̄geey=**gu**=ʔan ʔaa taa-gən.
 the.bread I see[NMLZ]=as.soon.as I eat-PST
 「私はパンをみると、すぐに食べた」

(3) dii hitʔacan+ʔinaa-dyaa=**di**=ʔuu dii ʔawga ʔləʔinaa+sdiŋ-gən.
 I be.young-CONT[NMLZ]=during=FOC my mother get.married+two-PST
 「私が若かった時、私の母が再婚した」(-dyaa < -di [CONT])

これらの例のように、2つ（かそれ以上）の節が繋げられる時、それらの節の関係を示す標識が付加されている方を従属節、その標識を従属節標識とする（本稿では、太字で示すことにする）。一般的に従属節といった時は、名詞を修飾する連体修飾節（関係節）や埋め込み文で名詞句のように働く補文節などがあるが、本稿で扱うのは、連用修飾節として働く副詞節である。尚、ハイダ語においては、上の例が示すように、従属節は常に主節に先行する³。

本稿は、従属節において述語動詞の取り得る形式と従属節標識の関係の観点から従属節の分類を試みることを目的とする。

2. 従属節に現われる述語動詞の形式

従属節において現われる述語動詞の形式は、大きく分けて、定動詞、不定動詞、名詞化された形式の三通りある。定動詞は、いわゆる屈折接尾辞が付いた形式である。従属節に現われる述語動詞に付く屈折接尾辞は、-gən (PST) もしくは -s (REL.NPST) であり、従属節の述語に定動詞が現われる場合、主節の時制などに応じてそれらのいずれかをとり⁴。これらの屈折接尾辞が付加されて定動詞となっている述語が従属節に現われている例は、次の通りである。

³ 尚、従属節が主節に後行する場合は、次の例に示すように、追加を表わす =ʔaa が付加される。
 huu dii ʔaadga ʔga dawgən saah=gi ʔla kʔaatʔa, musəmuusgaay tʔəʔgwaayagiʔ-gaay=**gan**=ʔaa.
 then my father rock got upward 3 throw the.cow scare-NMLZ=in.order.to=AFTH
 「私の父は、手に持った石を上投げた。牛を驚かせるために」

⁴ 主節に現われる屈折接尾辞には、他に -ga (NPST), -gay (PR) がある。いずれも従属節に現われることがなく、前者は平叙文、後者は内容疑問文において用いられる（但し、平叙文に現われることもある）。更に、命令文や極性疑問文に現われる -ə のもあるが、これらは、ここでの議論には大きく関わらないので、ここでは省略する。

(4) dii qat'uu-gən=gagən='uu χaw ʔə=niłgən.
 I be.thirsty-PST=because=FOC tea I=drink[PST]
 「私は喉が渴いたので、お茶を飲んだ」

(5) huu ʔə=suu-s=gəŋəŋ gaal ʔgunʔuʔ='uu xalqaa-gəŋ-giin-ii.
 then I=say-NPST=like night three=FOC go.by.boat-HABIT-PST-INFO
 「それで、私が言ったように、3日間、ボートで行ったものだ」

これらの屈折接尾辞は、いずれも時制を表わす要素であるが、それらのいずれが従属節の述語動詞に用いられるかは、後続する従属節標識によって決まる(但し、従属節標識と述語動詞の形式は一對一で対応しているわけではない。3節参照)。これらの屈折接尾辞はいずれも単文の述語動詞にも付加されるが、-s (REL.NPST)は、主節の動詞に標示される時制によって決まる相対的な時制の標識であるゆえに、-sによって定動詞となっている述語の従属節は、-gən (PST)による定動詞が述語となる従属節に比べ、自立性が低いといえる。

しかし、従属節の述語は必ずしも定動詞とは限らず、次の例のように、これらの接尾辞が一切付かない不定動詞(あるいは不定形と称する)の場合もある。

(6) χaayda kil t'ə=gyaagin-gii=gyaan='uu ʔad t'ə=daalsgiidaŋ.
 Haida.language 3PL=use-always=if=FOC with 3PL=find.useful[PR]
 「ハイダ語を使えば、人々はハイダ語が役に立つと思う」⁵

このような不定動詞で終わる節は、単独で現われることがないので、自立性は低いといえる⁶。

一方、従属節に現われる述語動詞が名詞化する場合もある。名詞化に関わる形態的手法は、接尾辞 -gaay (-aay) ~ -geey (-eey) (以下、-gaayで代表させる)の付加と動詞末尾の母音変換である。例えば、

⁵ *χaayda Kil phrases* CD #5, Track 89 (Skidegate Haida Immersion Program, 2004)

⁶ 但し、今の話者の話すハイダ語においては、屈折接尾辞が付かない不定動詞で節や文が終わることが多い(例えば、(14)など)。不定動詞の現われが談話の流れにおいて何らかの機能を担っている可能性も十分考えられるが、それとは別に、不定動詞が多用されるのは、屈折接尾辞の付加にかかる複雑な形態音韻規則を避ける、一種の単純化によるとも考えられる(堀2013も参照)。

(7) tlaan 'lə=ʔwaa-gaay=**dləw** naagaay=sda 'la qaaydən.
 no.more 3PL=do-NMLZ=when the.house=from 3 leave[PST]
 「彼はやめると、家を出た」

(8) dagaʔ t'ə=χaw-gagyaa=**gyaan**-aa dajiŋ tlah gut'asəŋ…
 tomorrow 3PL=fish-go[PL.NMLZ]=if-IMP hat new wear[IMP]…
 「明日、彼らが魚釣りに出るなら、新しい帽子をかぶれ」 (Swanton 1905: 31)

これら2つの名詞化の方法のうち、広範にみられるのは接尾辞 *-gaay* による名詞化であり、母音変換は生産的ではない。母音変換は、従属節標識が付加される動詞の末尾の音節でみられ、多くの場合、二重母音 ((8)の接尾辞 *-gagi* 'go out' (PL) > *-gagyaa* など) や長母音となって現われる⁷。母音変換によって名詞化されてできた形式は、*-gaay*による名詞化と違って、それ単独で名詞一般のように振る舞えないという点で、自立性はかなり低いとみられる。例えば、次の例において、動詞 *halχa* 'to gather' を主語とするには、(b)のように母音変換によって名詞化した形式は不適格であり、(a)のように名詞化接尾辞 *-gaay* によって名詞化した形式でなくてはならない。

- (9) a. ∅=gi halχa-gaay siŋgiic'i-gəŋ-giin-ii.
 ∅=to gather-NMLZ be.hard-HABIT-PST-INFO
 「それ (=∅) を集めるのは、大変なものだった」
 b. *∅=gi halχaa siŋgiic'i-gəŋ-giin-ii.
 ∅=to gather[NMLZ] be.hard-HABIT-PST-INFO

以上、ハイダ語の従属節の述語として現われる動詞の形式を、自立性の高さも含めてまとめると、次のようになる (>の左側が自立性が高いことを示す)。

- (10) 従属節に現われる動詞の形式
 a. 動詞的 -gəŋ > -s > ∅ (不定動詞)
 b. 名詞的 -gaay > 母音変換

⁷ 現代の話者の話すハイダ語においては、少なくとも Swanton (1905) や Enrico (2003) にみるほどに頻繁に母音変換が観察されるわけではなく、かなりのものが廃れかかっているようである。

3. 従属節標識と述語動詞の形式

上で述べたように、従属節標識と述語動詞の形式は一対一で対応するわけではなく、従属節の述語動詞は、同じ従属節標識の場合であっても、上述の2つかそれ以上の形式となることが多い。

まず、従属節に現われる動詞の形式が1つに限られるのは、(11)～(13)の従属節標識の場合であり、それらの従属節では、述語動詞が、*-gaay*が付加された形式（すなわち、(10b)の名詞的なもの）となることが多い⁸。

- (11) *ʔiinəŋaay sɕuŋga-gaay=k'yaawga tɿə=gid-s=gyaan*
the.herring spawn-NMLZ=in.order.to 3PL=wait-NPST=when
χagu=gi='uu tɿə=halχa-gəŋ-gin.
halibut=to=FOC 3PL=gather-HABIT-PST

「人々は、鯧が産卵するのを待っている時、オヒョウをとったものである」

- (12) *hak'waan daa saaw-geey=gaadχan='uu*
that.way you say-NMLZ=if.not=FOC
gəm ʔəŋgʊlχaa-geey daa qiiχa-gəŋ-saŋ.
NEG work-DEF you find-NEG-FUT[PR]

「もしあなたがそのように言わないなら、その仕事には就けないうらう」

- (13) *'lə=sk'iisdlə-gaay=gá='uu sabəlii-gaay 'laa taa-gən.*
3=be.full-NMLZ=until=FOC bread-DEF 3 eat-PST

「彼（女）はお腹がいっぱいになるまでパンを食べた」

これらの従属節に現われる述語は、形態的にみれば、名詞化接尾辞によって名詞類になっているので、節というよりも句というのが適切かもしれない。但し、名詞類に変換されても、(11)のように、その節の主語 *ʔiinəŋaay* ‘the herring’ は、そのままであり⁹、更に、その後続の主節とは主語が異なっている（後続の節の主語は *tɿə=* ‘they’）。

⁸ Enrico (2005) によれば、(11) の *=k'yaawga* ‘in order to’ や (12) の *=gaadχan* ‘if not’ の場合は、その従属節の述語は母音変換によって名詞化されることもある。

⁹ ハイダ語のアライメントは、名詞に主語を示す標識が付かない、無標示型である。

一方、動詞的なもの (= (10a)) で従属節の動詞の形式が1つに限られるのは、従属節標識が^s =*qawdi* ‘after’ の場合のみである。例えば、

- (14) *huu* 'lə=q'aanɡinəŋ=qawdi dii naanca q'aaʔuu.
 then 3=whine=after my grandmother get.up
 「彼がしばらくむずかった後、私の祖母が起き上がった」

この例の従属節の動詞 *q'aanɡinəŋ* ‘to whine’ は屈折接尾辞がついていない不定形である。

(11) から (14) の従属節の述語には時制標識である屈折接尾辞が一切付かないゆえに、その節で表わされる出来事の時間は、主節の述語で表わされるそれによって指定される。

次に、従属節の述語動詞の形式が二種類ある場合をみってみると、大きく分けて、次のようなパターンがある。

- [1] -s (REL.NPST) ~ 名詞化 (接尾辞 *-gaay* の付加と母音変換の両方もしくはいずれか一方)
 [2] a. -s ~ 不定動詞
 b. -s ~ *-gən* (PST)

[1] は、述語の動詞が^s -s (REL.NPST) が付加された形式あるいは名詞化した形式となるかのいずれかである。例えば、

- (15) a. *hak*'waan='uu ʔə=dləjuu-gas-əs=**gan**'uu
 that.way=FOC I=act-FUT-NPST=in.order.to=FOC
saah 'laana χaŋ=gu kigaŋ ʔə=q'aalaŋ-ga.
 God face=at own.name I=write-NPST
 「そのように振る舞うために、私は神の面前で自分の名前を書く」
 b. *huu* k'udʔwaal=**gan**'uu ʔəgəŋ 'la giitgi-da-gən.
 then die[NMLZ]=in.order.to=FOC oneself 3 be.ready-CAUS-PST
 「彼は、死ぬために準備をした」

いずれも従属節標識 =*gan* によって2つの節が繋げられているが、(15a) では従

属節の述語動詞に *-s* (REL.NPST) (但し、ここでは異形態の *-əs* が現われている) が付いているのに対し、(15b) では、動詞 *k'udʔuʔ* 'to die' において母音変換が生じ (*u > waa*)、名詞化している¹⁰。いずれにおいても時制を表わす標識は付かないので、時制は、主節のそれに依存する。従属節標識 =*gan* の場合、動詞はこのように両様の形式が現われるが、両者に大きな意味的な違いはない。=*gan* と同じようなパターンを示す従属節標識には、=*kungasda* 'before', =*gaŋaaxan* 'as soon as' などがある (但し、これらの従属節標識の場合、名詞化は、接尾辞 *-gaay* の付加によるものに限られる)。

[2a] は、従属節の述語動詞が屈折接尾辞 *-s* (REL.NPST) をとる場合と一切の屈折接尾辞が付かない不定形の場合があるというパターンである。すなわち、屈折接尾辞の付加は随意であり、仮に *-s* が付いたとしても、従属節の時制は、主節に依存するという点で自立性は低い。例えば、

- (16) ʔiitl'ə q'ud(-s)=sk'yaan gəm t'aləŋ gə taa-gəŋ-gən.
 we be.hungry(-NPST)=although NEG we INDF eat-NEG-PST
 「私たちはお腹が空いていたけれども、何も食べなかった」

(16) の従属節標識 =*sk'yaan*¹¹ の場合は、*-s* (REL.NPST) の付加が随意である、つまり、従属節の動詞が不定形であることもあり得る。

それに対し、[2b] の場合の従属節の述語は定動詞でなくてはならず、主節の動詞の時制に応じて屈折接尾辞 *-s* (REL.NPST) もしくは *-gən* (PST) が必ず付く。例えば、

- (17) 'lə=ʔistl'əχa-s/-gən=sgawdagi 'laa=ga ʔə=kil'laa-gən.
 3=come-NPST/-PST=because 3=to I=thank-PST
 「彼(女)が来てくれたので、私は、彼(女)に感謝した」 (= (1))

(17) の =*sgawdagi* の場合のように、従属節の動詞に、屈折接尾辞の *-s* (REL.NPST), *-gən* (PST) のいずれかが必ず付加され、従属節の述語が定動詞でなくてはならないものには、=*k'yaat* 'everytime' などがある。

¹⁰ =*gan* が従属節標識となる従属節の述語は、*-gaay* によって名詞化された形式の場合もある。

¹¹ 自由変異として =*sk'yaaxan* という形式もある。

続いて、従属節の述語動詞がとる形式が三種類ある場合をみると、

- ① -s (REL.NPST) が付いた形式～不定動詞（つまり、屈折接尾辞が一切付かない形式）～母音変換によって名詞化した形式
- ② -s (REL.NPST) が付いた形式～屈折接尾辞の付加が随意（つまり、定動詞か不定動詞かの選択が自由）～名詞化接尾辞が³付いた形式
- ③ -s (REL.NPST) が付いた形式～-gən (PST) が付いた形式（つまり、定動詞）～名詞化接尾辞の付加あるいは母音変換によって名詞化された形式

の3つのパターンがみられる。

まず、①は、=gyaan ‘if’ が従属節標識として付加された従属節の述語動詞にのみみられる。次の例を参照：

- (18) a. gaal+yahgu-gii†-s=**gyaan**=’uu tlaan ’laa=gan †ə=†ganguł̥xa-sga.
 midnight-become-NPST=if=FOC no.more 3=for I=work-FUT[NPST]
 「夜中になれば、私はもう彼のために働かない」
- b. ʔaan †aa gə †gay=**gyaan** t̥əguχan gu ’lə=q’ayχa-sga.
 here I INDF dig=if anyhow at 3=be.stuck-FUT[NPST]
 「私が（穴を）掘れば、とにかく彼はそこで身動きがとれなくなるだろう」
- c. ʔəsii t̥əgaay=**gá** aliens-gaay ʔistl’əχaa=**gyaan**
 this place[DEF]=to aliens-DEF come[NMLZ]=if
 gə gaayaa-s=’uu t̥l’ə=ʔisda-tlaagəŋ-gas-ga.
 INDF be.fat-NPST=FOC 3PL=take-first-FUT-NPST
 「もしこの土地にエイリアンが来たら、太った人が最初に連れて行かれるだろう」

(18a) は述語動詞が -s (REL.NPST) をとっている場合、(18b) は述語が不定動詞の場合、(18c) は述語動詞が母音変換によって名詞化した形式 (*ʔistl’əχaa* < *ʔistl’əχa*) が現われている場合を示している。同じ従属節標識に対し、これら三通りの形態的な違いがみられるが、それらの間の意味的な違いはないようである。

②のパターンを例示するのは、次の (19) である。

- (19) a. 'lə=jaaga q'aafawaa(-s/-gən)=**silaayga** hawχan 'laa taydaayaa-gən.
 3=wife get.up[EVD](-NPST/-PST)=after still 3 LIE[EVD]-PST
 「彼は妻が起きた後も横になっていた」 (Enrico 2005: 618)
- b. gyaan=haw sda 'laa giyaafə-gaay=**silaayga**=haw
 and=FOC after 3 hunt?-NMLZ=after=FOC
 'laaga ?awhda gə tagaay 'laaga 'la q'uɫdaayaaj ?wan suu-ga.
 3POSS porcupine food[DEF] 3POSS 3 steal[EVD.COMP] they say-NPST
 「彼が狩りに出かけた後、ヤマアラシは、彼の食べ物を盗んだそうである」 (Swanton 1905: 45)

このタイプでは、従属節の述語動詞に時制を表わす屈折接尾辞を付加するのは随意であるので、この場合は、(19a)のように、-s (REL.NPST) もしくは -gən (PST) の有無に拘わらず、適格である。あるいは、(19b)のように名詞化接尾辞 -gaay によって名詞化された形式となることも可能である。=*gii* 'because' も従属節の述語動詞がこの =*silaayga* 'after' と同じようなパターンを示す (但し、名詞化の場合には、母音変換もみられる)。

最後に、次の (20) によって③の場合をみってみる。

- (20) a. huu 'laa=?əsiŋ siŋ+gwaa?ad-ən/-s=**sda**=ʼuu
 then 3=too die-PST/-NPST=after=FOC
 dii qaaga kigaay ?isda-gən.
 my uncle the.name take-PST
 「彼が亡くなった後、私のオジがその名前を受け継いだ」
- b. 'lə=jaaga k'ud?waaleey=**sda** tada sgwaansiŋ-gyaalgeey=dləw …
 3=wife die[NMLZ]=after year be.one-become[NMLZ]=when
 「彼の妻が亡くなった後、1年経った時…」

(20a) は、従属節の述語が定動詞 (-s (REL.NPST), -gən (PST)) である場合、(20b) は、名詞化接尾辞が付加された場合をそれぞれ示している。従属節の述語動詞が名詞化する場合、名詞化接尾辞が付加されるか、それとも、母音変換によるかは、従属節標識によって決まる。例えば、従属節標識 =*gyaan* 'and' が付いた次の例では、その述語動詞は、母音変換によって名詞化している。

- (21) gina qiiɣaa=gyaan='uu dii gudəŋaay ɬkuxida-gəŋ-giin-ii.
 INDF find[NMLZ]=and=FOC my mind be.worried-HABIT-PST-INFO
 「何かをみつけて、私の心が落ち着かなくなったものである」

この従属節標識 =gyaan が付いた従属節の述語（この例では qiiɣa ‘to find’）は、母音変換による名詞化した形式（qiiɣaa）だけでなく、-s あるいは -gəŋ (PST) が付いた定動詞の場合もある。他に =dləw ‘when’ も同じパターンを示す。

4. まとめ

以上、従属節標識によって、従属節の述語動詞がとりうる形式の種類と型を見てきた。従属節を分類する際に本稿で用いた視点は、次のようなものである。

- a) 従属節の述語が動詞的であるか、名詞的であるか。
- b) 動詞的である場合は、定動詞である、つまり、屈折接尾辞が付加されるか否か、それとも、それらの付加が随意であるか¹²。
- c) 名詞的である場合は、どのような手法によってその動詞が名詞化されているか。

データが揃っておらず、幾分不十分なところがあるが、それらの観点から従属節を分類したものをまとめると、おおよそ (22) のようになる¹³。

¹² 但し、先に指摘した通り、近年の話者が話すハイダ語においては、単文あるいは主節においてさえ、屈折接尾辞が付かない不定動詞が現われることが多く、屈折接尾辞の付加が随意か否かが不分明になりつつある。

¹³ 一部、データが不足しているものは、Enrico (2003, 2005) によって補った。但し、ここにあげたのはすべての従属節標識を網羅しているわけではない。また、主に20世紀初頭に生まれた話者を対象にしている Enrico の記述にも不正確なところや現代の話者とは異なるところがあるため、今後、更に詳しく調べる必要がある。

(22) 従属節標識と従属節の述語動詞の形式の関係

標 識	動詞的		名詞的		意味分類*
	定動詞 -gən	-s	不定動詞	-gaay 母音変換	
=qawdi ‘after’			+		sequence
=gaadχan ‘if not’				+	(+) ¹⁴ conditional
=k’yaawga ‘in order to’				+	(+) purpose
=cá ‘until’				+	sequence
=kungasda ‘before’		+		+	sequence
=gaŋaaxan ‘as soon as’		+		+	sequence
=gu ‘while’		+		+	overlap
=guud ‘while’		+		+	overlap
=gan ‘in order to’		+		+	purpose
=gyaan ‘if’		+	+	+	conditional
=sk’yaan ‘although’	(+)**	(+)			concessive
=gaŋəŋ ‘like’	(+)	(+)			manner
=silaayga ‘after’	(+)	(+)		+	sequence
=di ‘during’	(+)	(+)		+	overlap
=cii ‘because’	(+)	(+)		+	(+) reason
=k’yaat ‘everytime’	+	+			circumstantial
=sgawdagi ‘because’	+	+			reason
=gyaan ‘and’	+	+		+	coordination
=dləw ‘when’	+	+		+	time
=sda ‘after’	+	+		+	sequence
=gagən ‘because’	+	+		+	reason

* 意味分類は、Thompson et al. (2007) による。

** () は、それらの屈折接尾辞（時制標識）が随意であることを示す。

この表の上にあるものは、専ら名詞句となるので、節としての自立性が低い
のに対し、下の方は、従属節に定動詞が現われるという点で、節としての自立

¹⁴ これらの動詞が母音変換によって名詞化したとするのは、Enrico (2003, 2005) の記述による。筆者自身の調査では、その点を確かめていない。

性が高いと考えられる。定動詞が現われるものの中でも、述語動詞が -s で終わるものは、-gən で終わるものに比べ、自立性が若干低い。

一見したところ、従属節標識の表わす意味分類と従属節の自立性の間に何らかの相関関係は認められないが、他にも、例えば、主語が主節と従属節で一致する必要があるのかどうか、一致する場合の主語の現われ方、また、これらの従属節の間において、一方が他方より大きな従属節の中に現われ得るのか、また、副詞句のかかるスコープの広狭、主節と従属節の間の時制の関係などを考慮すれば、より細かい分類ができるとともに、何らかの傾向が見えてくる可能性も考えられる。

ところで、従属節の述語が動詞的である場合、その形式は、屈折接尾辞 -s (REL.NPST), -gən (PST) が付いた定動詞、あるいは、それらが付かない不定動詞に限られるというのは、連体修飾構造の述語のそれと同じである点に注意する必要がある。堀 (2018) では、連体修飾構造を疑似名詞句とする解釈を示しているが、本稿で扱った従属節標識の中には、いわゆる後置詞として名詞句に付くものもある。例えば、

- (23) a. Vancouver=gu 「バンクーバーで」 Cf. =gu 'while, as soon as' (2)
b. taan=gəŋəŋ 「クマのように」 Cf. =gəŋəŋ 'like, as' (5)
c. naagaay=gá 「家に向かって」 Cf. =gá 'until' (13)
d. 'laa=gan 「彼(女)のために」 Cf. =gan 'in order to' (15)

すなわち、同じ形式が名詞句にも節にも付き得るという点から、名詞句と節の間に平行性があると考え、ここで扱った連用修飾構造と連体修飾構造を統一的に解釈する可能性も考えられる。まだ成案を得るに至っていないが、いずれ考究すべき問題として指摘しておく。

参考文献

- Enrico, John. 2003. *Haida syntax*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- Enrico, John. 2005. *Haida dictionary: Skidegate, Masset, and Alaskan dialects*. Fairbanks: Alaska Native Language Center / Sealaska Heritage Institute.
- 堀 博文 2013. 「危機言語にみる変異と変化—ハイダ語（北米先住民諸語）の場合」, 『明海日本語』 第18号増刊号: 75–97 (明海大学日本語学会).
- 堀 博文 2018. 「ハイダ語の連体修飾構造」, 『静言論叢』 第1号: 77–120 (静岡大学言語学研究会).
- Swanton, John R. 1905. *Haida texts and myths: Skidegate dialect*. (Bureau of American Ethnology, Bulletin 29), Washington, D. C.: Government Printing Office.
- Thompson, Sandra A., Robert E. Langacre, and Shin Ja J. Hwang. 2007. Adverbial clauses. In: Shopen, Timothy (ed.), *Language typology and syntactic description, Vol. 2: Complex constructions*: 237–300. Cambridge University Press.

* 本稿のハイダ語例は、次の方々から、直接的にまた間接的に得たものである（イニシャル、性別のみを記す）。ご協力に深甚なる謝意を表したい。 *Dii gi ilgiidan sgawdagi dallng ga hll kil'laaga. Haw'a!*

RJ (m), DM (f), NP (m), WP (m), ER (f), EW (m), JW (m)

* 本稿は、科学研究費（基盤研究 (C)）「ハイダ語の統語法に関する記述研究」（研究代表者：堀 博文，課題番号：19K00547）による研究成果の一部である。